(8)環境と調和したライフスタイル

- 市町村のきめの細かい分別収集に応じて、ごみの素材等の種類に従った分別排出が一般化する。また、こうして収集されたごみのうち容器包装廃棄物は事業者のリサイクル責任に基づき、再生利用されるようになる。
- 市町村の分別活動には手間がかかるが、高齢者が地域ボランティアとして参加することによって、円滑に分別収集が進む。
- ほとんどすべてのごみが再使用、再生利用、熱回収を伴う焼却処理のいずれかで処理される「ごみゼロ社会」が構築される。
- CO_2の排出量の抑制等のため、室温を適切に調整したり、公共交通機関をなるべく利用するなど、省エネに向けたライフスタイルが確立される。
- 環境教育が学校や地域社会で実施される。

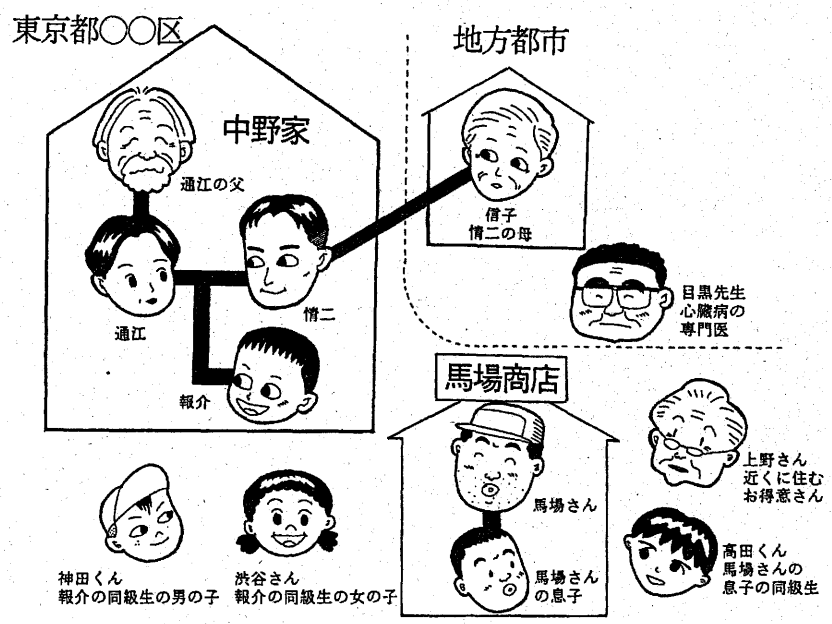
ある高齢世代のくらしのイメージ

- 住んでいる市では7種類に分けた分別収集が行われている。分解、分別しやすい商品も増えてきており、きめの細かいごみ出しができる。また、再生品が多く流通しており、利用することが多くなった。
- 週に3回、市の分別収集の手伝いをしている。先日、リサイクルプラザで牛乳パックを再生利用した玩具を作り、子供たちに配ってあげた。
- ごみの従量によって処理手数料が課せられるようになってから、なるべく簡易包装等ごみにならない商品を購入するようにしている。このため排出するごみが減った。
- ごみ処理の費用のかかる製品については処理費用が価格に上乗せされているので、毎日の消費生活の中で、ごみ処理について関心が高まった。
- 省エネのため冷暖房の温度を1℃調整している。
- 住宅の断熱化や太陽光発電を利用する者が増えてきており、価格も手頃になったので、住宅の改築に際して設置した。

高度情報通信社会のある日
(経済審議会高度情報通信社会小委員会報告参考資料)

高度情報通信社会のある日

登場人物の関係



現在（平成７年、1995年）は、まだ高度情報通信社会の入口にすぎないが、職場あるいは家庭でネットワークにつながったパソコンを利用したことのある人は、パソコン通信やインターネットの楽しさ、その潜在的な力を既に十分に認識し、情報通信の高度化に大きな期待を抱いていることであろう。

しかし、多くの国民は、高度情報通信社会は自分とは無縁のことと思っており、一部の特殊な人たちだけの話と冷やかな見方をする人もいる。しかし、電話が発明されたことで、遠くの人と確実な意思の疎通を図ることができるようになり、テレビが発明されたことで、世の中で起きている多くのことを目で見ることができるようになるなど、新しい発明の恩恵は国民の間に広く行き渡り、ライフスタイルを変化させ、多くの新しいビジネスチャンスを生み出してきた。現在進んでいる情報通信の高度化は、これらの発明と同様の恩恵と変化を広く国民にもたらすことになるであろう。

この参考資料は、光ファイバー網が各戸に普及するとともに、先進国でも最も高齢化が進んだ社会になっている21世紀初頭の日本を想定し、都内に住む庶民の一家を例にとって、今後の国民各層の広範かつ積極的な取組によって実現される高度情報通信社会が、具体的にどのような形で国民に恩恵をもたらし、そこにどのようなビジネスチャンスが期待できるのかを、空想物語の形でまとめたものである。

物語の中では、現在の複雑なパソコンが誰にでも使える簡単な道具になり、就業、医療、娯楽などの面で、国民の生活がより豊かになる一方で、ハッカーの暗躍や偽手紙事件など、困ったことも起きるであろうことが描かれている。この物語をご覧になって、こんな世の中になるのも悪くはないと感じるのであれば、身近にあるパソコンに自ら触れてみて、その世界の持つ可能性を体験してみるのはどうだろうか。

主な登場人物
- 中野通江（38）会社に通勤していたが、父親が倒れたため同社の在宅勤務制度を利用し、ソフトウェア製作を行っている。夫、一人息子、実父と同居の4人家族。
- 中野情二（43）建設会社に勤務。企画調整を担当。情報通信の高度化が本格化し始めたときに入社。
- 通江の父（72）退職後悠々自適の生活を送っていたが、脳卒中（クモ膜下出血）で倒れてからは体が不自由になった。その後、リハビリで電動車椅子が使えるようになった。
- 中野報介（10）小学生。中野夫婦の一人息子。
- 神田くん（10）報介の友人の男の子。
- 渋谷さん（10）報介の同級生の女の子。
- 馬場さん（45）野菜を主にした馬場商店のあるじ。地域のまとめ役。
- 上野さん（76）馬場商店の近所に住む常連客。
- 高田くん（14）馬場さんの息子の友人。
- 中野信子（70）中野情二の実母。地方都市で一人暮らしをしている。心臓に持病を持っている。
- 目黒先生（52）心臓病の専門医。中野信子の健康相談の相手。

お断り　本参考資料の登場人物、会社、設定はすべて架空のものであり、実在のものとは一切関係がない。また、本資料に書かれたことの実現のためには、通信速度の飛躍的な改善や画像の鮮明度の向上などの技術的な課題、制度や慣行の変更などの課題があり、その実現には、今後の積極的な取組が必要である。また、統合型端末や電子貨幣など、今後の技術開発の影響を受けるものについては、現時点で考えられる形の一つを想定したが、実現の際には、本参考資料と異なる形になる可能性も大きい。

中野通江のある日

テレビや電話は進化する

01　起床後、朝食の支度をした。父の看護のためソフトウェア製作会社への通勤から在宅勤務へ変更してから、食事の支度は主に私がやっているが、忙しいときには２人で通勤していたときのように、情二さんが手伝ってくれるので大変助かっている。

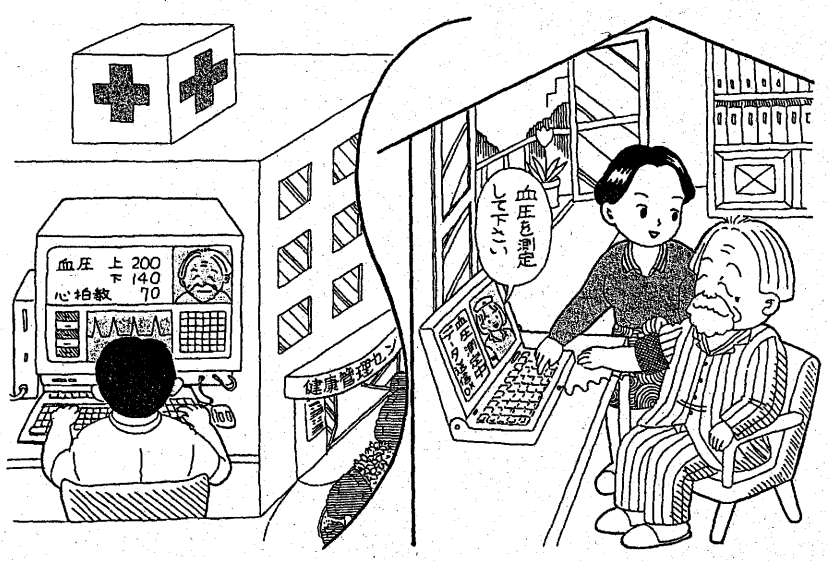
02　情二さんは、朝のニュースを見ている。ニュースや天気の情報を伝える番組は、ほとんどの家庭では光ファイバーを使用した有線放送を見ることが普通になった。我が家に光ファイバーが引かれたのは10年ほど前であるが、日本全国の家庭にほぼ普及したのは最近のことである。電話は、音声だけではなく、画像や文字もやりとりできる統合型端末が標準になっているが、それでも余る容量を有線テレビ放送やホームセキュリティに利用している。統合型端末は、普通の家庭で２台以上、ゆとりのある家庭では１人１台以上を置いており、テレビを見たりテレビ電話をかけたり多用途に使っている。ただ、端末の画面は必ずしも大きくないので、我が家では居間に壁面型ディスプレイを取り付けて、皆でテレビを見るときにはこれを使っている。

03　有線テレビのチャンネル数は、無数と言ってもよいくらいあり、お望みとあらば世界各国の番組も見ることができる。ニュース、スポーツ、スタジオでのトークショーなど、今この瞬間に作られて流されている番組のほか、既に放送された番組や公開された映画などを、利用者が選んで見ることもできる。道路混雑情報や天気予報など、時々刻々変わる状況についても、24時間専門のチャンネルを通じて知ることができる。

ネットワークは世界を広げ生活を豊かにする

04　食後、父の血圧、心拍数などの測定をした。測定機が自動的に地域健康管理センターへそのデータを送信し、異常があれば担当医から連絡が来る。父は、１年ほど前に脳卒中で倒れた。幸い命に別状はなかったものの、左半身にマヒが残ったため、１人で歩くことは困難になっている。本人も体の自由がきかなくなったことから、ふさぎ込みがちで、リハビリにもあまり取り組まず、一時はこのまま寝たきりになってしまうのではないかと心配した。しかし、暇を持て余していたのか枕元の端末をいじっているうちに、ネットワークを通じたコミュニケーションに時間を費やすようになっていた。父は、元々器用な人ではあったが、今日はこんなことをしたんだと私の息子の報介に自慢し、報介は報介でこんな使い方もあるんだと父に教える。父の交際範囲

情報通信で毎日の健康管理



はこのようにして段々広がり、父と同じ境遇の人たちが、その人の症状に応じてできる範囲で頑張っていることを知ると、自分から積極的にリハビリに取り組むようになり、今では、近所であれば電動車椅子で出掛けられるまでに回復した。

05　父の看病をしながら会社に通勤することは無理であったが、幸い、ソフトウェア製作の技術を会社が評価してくれたため、在宅での勤務を勧められ、同社で働き続けることができた。通勤がもともと困難な身体障害者の人も含め、以前から何人かの社員が在宅勤務をしていたので、私もその仲間入りすることにした。私の仕事は、オンラインショッピング用のデモソフトを製作することである。今日も、会社から電子メールで送付された発注内容と基礎データに応じて、オンラインショッピングの画面、音楽及び案内音声を作成している。この種のソフトウェアを製作するためのソフトウェアの進歩は著しく、誰でも講習を受ければ一通りのデモソフトを作ることができる。しかし、製品をどの角度から見せるか、どのような音楽を合成するか、案内音声は女性にするか男性にするか、また、若い人にするか年配の人にするか、製作者のセンスに負う部分はどうしてもなくならない。会社が私に在宅でよいから残ってほしいと言ってくれたのも、この点を評価してくれたものと考えている。